

【青い鳥】の未来の国のお話

●登場人物

アクヴォ
モルト
ヴィーノ
レーヴォ
シプチャル

主人公。記憶喪失の子供。
主人公の友達。子供たちの中では一番の古株。
手ぶらの子供。恋人に置き去りにされてしまった。
手ぶらの子供。地球に強く憧れてる。
発明家の子供。地球で船を作ることになっている。

時のおじいさん(時)

未来の王国にやってくる唯一の大人。頑固者。

リバーレ

自由に生きる喜び。強引で自分勝手だがポジティブ。

パトリーナ

母の愛の喜び。優しく大らかで時に厳しい。

ミストラクト

子供を愛せない不幸。ヒステリック。

※同一の役者が演じる

アディーア

愛する者を失う悲しみ。美しいが常に悲しそう。

生のおじいさん(生)

生の淵源にいる老人。のんびりした性格。

子供1〜9

生まれるのを待つ子供たち。

幸福1〜5

子供のささやかな幸福たち。常に元気いっぱい。

不幸1〜5

悪戯好きの不幸たち。お調子者で意地悪。

【青い鳥】の未来の国のお話

1. 未来の王国にて

はじめに波のさざめきが聞こえてくる。幕が開くと舞台中央にアクヴォが立っている。アクヴォは中に色とりどりの石が入った紐付きの瓶を首からぶら下げている。音楽が鳴り始め、アクヴォのダンス。

(最初地球を目指して船旅に出たアクヴォが、途中で船から落ちて海に落ち、波にあおられもがき苦しんでいるシーンの表現)

最初は凪いだ海をイメージさせる穏やかな音楽で、軽やかに踊る。だが徐々に音楽が激しいものに変わっていき、ダンスも激しいものに。最後は音楽をかき消すほどの激しい波の音がカッティンとしてきて、アクヴォが舞台中央で崩れ落ち、一度溶暗。

波の音が徐々にフェードアウト。舞台上が徐々に溶明していくとともに、オルガンの音色にあわせて子供たちの合唱が聞こえてくる。

場所は未来の王国、宮殿の大広場。壁や柱は淡く美しい空色で、外を眺められる窓がいくつもあり、中央に大きな扉。舞台センターではレーヴォ・シプチャルを含めた歌を歌う子供たち(1〜9)が円を囲むようにして座り込んでおり、その中央でアクヴォが眠りにについている(最初にあった瓶のペンダントが紐だけになっている)。1人、ヴィーノだけが隅っこで俯きがちに座り込んでいる(以降、指示があるまでこのまま動かさず黙ったままにいる)。

(♪子供たち全員)

遠く遠く 青い惑星 (ほし)

あれは地球 僕らの星

いつの日かあけぼのと共に

あの星に行くのを

時計の鐘の音がひとつつ鳴り響く。すると子供たちが顔を見合わせ、嬉しそうに笑う。

子供1 「ああ、やっとだ……忘れ物、ないかなあ?」

子供2 「大丈夫! 準備万端だよ!」

レーヴォ 「楽しみだねえ〜」

全員 (アクヴォ以外) 「ねえ〜〜〜!」

子供たちがそれぞれ自由に行動。窓の外を眺めに行ったり、持ち物のメンテナンスを始めたり、落ち着きなく歩き回ったりする。子供たちの中央で眠っていたアクヴォが露わになると、舞台上にモルトが駆け込んでくる。

モルト 「ねえ! 今、鐘がひとつ鳴ったよね!」

レーヴォ 「そっだよ!」

ふたつめの鐘の音。

【青い鳥】の未来の国のお話

レーヴオ「ふたつ目だ！もうすぐそこまで来るー」

モルト「まだ勝手なことしちゃダメだよ。僕まで時のおじいさんに怒られるんだか
いぬ」

レーヴオ「…はあーっ」

レーヴオがふたつ目を見てそのほき回して「へ。へ。モルト、窓の外を見に行こうとするが、
途中でアクヴォに気付いて立ち止まる。

モルト「…あわっ」

モルト、アクヴォに駆け寄り、揺り起す。

モルト「ねえー！ねえー！」

アクヴォ「…じーん…」

アクヴォ、目を覚まして急ぎに起き上がる。じぼろろと意識が覚醒するとい、
不思議そうにあたりを見回し、最後にモルトと顔を合合わせる。

モルト「どうして戻ってきちゃったのー!?地球に行けるって、喜んでたじゃないー」

アクヴォ「…チキユウ……なあにそれっ」

モルト「ええっ」

アクヴォ「…きみ、誰っ」

モルト「…そっか、忘れちゃったんだ。…気づかないで！そういう子、たまにいる
から。君だけじゃないよー」

アクヴォ、起き上がった宮殿内をまじまじと眺める。

アクヴォ「じいちゃん」

モルト「じいちゃん未来の王国。生まれるまで、みんなここで暮らしてるんだよ」

アクヴォ「生まれるまでっ」

モルト「僕と君、ここにいてるみんな、まだ生まれてないんだ！地球にいるお父さ
んとお母さんが、僕たちが生まれるための準備をしてくれるの。その時が来
るまで、じいちゃんって待つかなきゃいけないんだ」

アクヴォ「お父さん、お母さん？地球っ」

(♪モルト)

遠く遠く 青い惑星(ほこ)

たくさんの命が生きる星

そこには海も大地もあって

僕のパパとママもいる

いつの日かあけぼのの空に

あの星に行くのね

【青い鳥】の未来の国のお話

歌の終わりと共に、みつつめの鐘の音。子供たちが大はしゃぎで扉の前に待機する。

モルト「みつつめだ！もうすぐ時のおじいさんが来るー」

アクヴォ「時のおじいさん？」

モルト「ほら、ちゃんとお出迎えしないと、あとでツツツ言われちゃうよー」

モルトに手を引かれ、2人揃って扉の前に待機する。すると大仰な音楽に合わせて扉が開き、時のおじいさんが洗われる。

時「時刻を迎えた者たちは揃っているかー」

レーヴォ・子供1〜5「はーはーはー」

子供1〜5が一斉に扉の向こうへ行くようにするが、時のおじいさんに阻まれる。

時「ひとりずつだー各自持ち物を持って、そこに一列に並べー！まったく、口がすっぱくなるほど言い聞かせているのに、物覚えの悪い連中だ…」

アクヴォ「じわじわ…」

モルト「悪い人じゃないんだけどね。頑固じいさんだから」

時「モルトの方を見て」その手ぶらどもー何か言ったか？」

モルト「(慌して)なんでもないですー」

時のおじいさん、舌打ちをひとつして子供たちを1人ずつ扉の向こうへ送っていく。途中、まだ生まれる時刻じゃない子供が混じっており、その都度きつく叱って門前払する。(子供1〜3が扉の向こうへ行く子供、4〜5は戻される。)その間、アクヴォとモルトは「ソソソ話をする。

アクヴォ「手ぶらじわじわ」

モルト「何にも持ってない子のことー」

アクヴォ「(子供1を指して)じゃあ、あの子は？」

モルト「確か…発明家の子だったかなあ？」

時「すいぶん大荷物だな。何を持っていくんだ？」

子供1「313の美しい楽曲たちー」これ聞いてよ、自信作なんだー」

子供1が箱の蓋を開けると、オルゴールが鳴り出して曲を奏でる。

時「作曲家か。蓋はしっかりと閉めていけよ。通ってよー」

子供1、箱の蓋を閉めて、嬉しそうに扉の外へ駆けていく。

モルト「地球に行く時は、何か持っていかなきゃいけないんだ」

アクヴォ「何かって、何を？」

モルト「なんでもー手ぶらのままじゃ、あけぼのに乗せてもらえないんだ」

アクヴォ「あけぼのって？」

【青い鳥】の未来の国のお話

やがて船が見えなくなり、音楽もフェードアウト。子供たちが散り散りになって、それぞれ3つのグループ（手ぶら、順番待ち、発明家）で固まりだす。
（手ぶら→4・5、順番待ち→6・7、発明家→8・9）
子供4、唐突に指を1本立てて、

子供4 「この指とーまれー！」

シーヴォと子供5が子供4の指を掴み、きゅきゅとほじゅへ。

子供5 「この指とーまれー！」

次はシーヴォと子供4が指を掴む。

シーヴォ「この指とーまれー！」

子供4と子供5が指を掴もうとするがシーヴォがふざけて逃げ始め、追いかけることになる。

アクヴォ「あれ何？」

モルト「最近流行ってるの！僕が考えたんだよ」

アクヴォ「へえー…」ワイーンを見つけて「あの子は？」

モルト「そっことしてあげて。『ショーシンチュー』だから」

アクヴォ「どっという意味？」

モルト「わかんない。時のおじいさんが言った」

アクヴォ「あの子も手ぶらだね。（順番待ちグループを指して）あの子たちは何か持

ってるの？」なんてあげほのに乗らないの？」

モルト「あの子たちは順番待ちだからね。そのうち乗れるよ」

アクヴォ、順番待ちの子供6のもとへ行って、

アクヴォ「ねえー！それ、なあ？」

子供6 「これ？これ？これはね。」

（♪子供6）

生まれたらもし生まれたらこれを持っていくんだ

長い手足に美しい顔ありあまる富と名声

たくさんの人に愛されてたくさんの人に疎まれる

誰にも横取りされない僕だけのギフト

子供7 「ねえねえ！僕のも見てよー！」

（♪子供7）

生まれたらもし生まれたらこれを持っていくんだ

窃盗罪に放火罪に強盗致傷罪

【青い鳥】の未来の国のお話

(♪アクヴォ)
空き瓶いっばいいたくねえの
何か詰めたような…

モルト「…どうしたの？」

(♪アクヴォ)
誰にも横取りされない僕だけのギフ
大切にしていたはずなのに
思い出そうとしても蘇るのは波の音

アクヴォ、首かららぶらぶら下っている紐に気付き、手ごのせて見つめる。やがて一番最初にあった瓶がないことに気づき、愕然。

アクヴォ「…ああああー！ー！ー！ー！無い！ー！ー！ー！ー！」

他の子供たちが声に驚いて一斉に振り返る。
アクヴォ、扉のもとへ走っていき、扉を開けようとするが門扉が重くてなかなか開かない。

モルト「ちょっとー！」

モルト、慌ててアクヴォに抱き着いて止め、アクヴォはモルトを振り切ろうと舞わね。

モルト「なにしてるの！だめだよー！」

アクヴォ「でも！探しに行かないとー！」

モルト「何をー？」

アクヴォ「わかんないけど！落としちゃったんだ！」

体力が尽きて大人しくなるアクヴォ。

アクヴォ「…僕、あけぼのから落ちて、その時失くしちゃったんだ。色んな何かをたくさん詰めて、大切に首からぶら下げてたのに…。星の海のどこかには
ずなんだ！あれがなまきや、地球に行けない！」

モルト「…でも、外に出たらいけないんだよ！ルールを守らない子は、生まれるのを10年も先送りにされちゃうんだってー！」

アクヴォ「バシなまきや平気だよ！次の鐘までに戻ってくるからー！」

モルト「でも！ー！」

シプチャル「…どうやって探すの？」

アクヴォとモルト、シプチャルに振り返る。

【青い鳥】の未来の国のお話

アクヴォ「そりゃ、泳いでなー！」

シプチャル「あははっ！そんなのすぐ溺れちゃうよー！」

アクヴォ「…じゃあどうしようって言うんだよ」

シプチャル、アクヴォに近づいて、

シプチャル「僕の船を使わせてあげてもいいよ」

モルト「ええっーっー！」

アクヴォ「いいのっ」

シプチャル「もちろん僕も一緒だけだねー！君じゃ操縦はできないだろうっ？」

レーヴォ、強く手を挙げながらやうやくいぬ。

レーヴォ「はいはいはい！僕も！僕もー！」

モルト「君までーっー！」

シプチャル「定員は問題ないよ」

アクヴォ「いいよー！一緒に行こうー！」

レーヴォ「やったあ~~~~ー！」

モルト「ダメだっちはあ~~~~ー！時のおじいさんが怒るよー！」
ヴィーノ「…あたしもー！」

全員が一斉にヴィーノに振り返る。く。く。ずっと座の込んでいたヴィーノ、おぼろげに立ち上がってアクヴォたちのせまへ。

ヴィーノ「あたしも連れてって！」

アクヴォ「…君もっー！」

ヴィーノ（力強く頷く）

アクヴォ「…いいよ。みんなで一緒に行こうー！」

シプチャル「よーしー！メンテナンスするから、少し待っててー！」

シプチャル、舞台袖へ走り去って行く。

モルト「…ほんとに行くのっ」

アクヴォ（強く頷く）

モルト「…また遊べると思ったのっ」

アクヴォ「すぐ見つけて帰っていいよ。そしたら遊ばないっ」

モルト「…おじいさんを見てっかっちゃんダメだよ」

アクヴォ、モルトに頷いてからレーヴォとヴィーノに向かっている。

アクヴォ「やうやくいぬっー！」

レーヴォ「いっへんやうやくいぬっー！」

ヴィーノ、アクヴォの背中を回して、再びその場へ座の込込せぬ。

【青い鳥】の未来の国のお話

レーヴオ「挨拶ぐらいしたらどうなんだよう」

アクヴオ「君、『シヨーションチュー』なんだって?」

レーヴオ「ちーがーう! その子は『コイヒトドーシ』だよ!」

アクヴオ「コイヒトドーシ?」

レーヴオ「最初はもうひとりいたんだよ。でもずいぶん前に生まれちゃったから、今はその子だけ」

ヴィーノ「…うわああああん!」

上半身だけその場に倒れ伏して泣き叫ぶヴィーノ。

ヴィーノ「うわああああん…!」

レーヴオ「いっつもああなんだよ。変だよね?」

シプチャルが戻ってくる。

シプチャル「オールオッカー! いっつも出発できるよ!」

モルト「急いで! 間に合わなへなっちゃん!」

アクヴオは頷くと、ヴィーノのもとに駆け寄って、手を差し伸べる。ヴィーノ、しばらく驚いたようにアクヴオを見上げていたが、やがて手を取って立ち上がる。

アクヴオ、シプチャル、レーヴオ、ヴィーノの4人が扉の前へ。

全員で顔を見合わせて、4人がかりで扉を開ける。少しずつ扉が開き、やがて完全に開いた瞬間、音楽開始。モルトと見送りの子供たちが踊り出す。

(♪4人)

探しに行こう 船に乗って

星の海の遙か彼方まで

こどもの僕らには大きな冒険

さあ旅に出よう 生まれぬ前へ

(♪アクヴオ)

どこにあるのかな 僕だけのギフト

それが何かもまだわからない

(♪シプチャル)

こんなチャンスきつともう来ない

自慢の船を試すんだ

(♪レーヴオ)

時が来ないのなら僕から行こう

憧れの地球へいざ!」

【青い鳥】の未来の国のお話

(♪4人)

探しに行こう船に乗って
星の海の遙か彼方まで
こどもの僕らには大き過ぎる冒険
さあ旅に出よう生まれる前」

アクヴォ、シプチャル、レーヴォの順に扉の外へ出ていく。照明がだんだん薄暗くなり、ウィーンの独唱。

(♪ウィーン)

あの人は今頃どうしているかしら？
地球のどこに生まれたかしら？
別の恋人はできたかしら？
あたしのことなんて忘れてたかしら？
叶わない恋でも諦められない
もう一度だけでいい会いたいの！

ウィーン、扉の外へ走って出ていく。
ダンサーの子供たちも踊りながら舞台袖へ。

(♪コーラス)

探しに行こう船に乗って
星の海の遙か彼方まで
こどもの僕らには大き過ぎる冒険
さあ旅に出よう生まれる前」

舞台転換。未来の王国↓船の中へ。
※以降、アクヴォ・シプチャル・レーヴォ・ウィーンの4人をまとめて記載する場合「アクヴォ一行」と表記

2. 星の海（船の中）

音楽が終わってしばらくして波の音。照明が徐々に明るくなり、船の中のシーンが始まる。(船は深海探査艇。あちこちに覗き窓があり、星の海の輝きが船内に漏れ込んでいる)
アクヴォとレーヴォは窓の外（海中）を眺めている。シプチャルは操縦桿の前に陣取り、ウィーンは隅っこに座り込んでいる。

アクヴォ「（感嘆の溜息）海がキラキラ光ってる」「
レーヴォ「これだけ深く潜っちゃえば時のおじいさんにも見つからないねー」
シプチャル「静粛にー！これから設計者であり操縦者でもあるこの僕の指示に従うよー」

アクヴォ「ちえっ、偉ぶっちゃって」

【青い鳥】の未来の国のお話

シプチャル「わかったら返事！」

アクヴォ・レーヴォ「はい」

シプチャル「(ヴィーノに向かって) 君もだよー！」

ヴィーノ(頷く)

シプチャル、満足そうに頷くと、アクヴォに向かって、

シプチャル「それで?どこに行くの?」

アクヴォ「…え?」

シプチャル「探し物!どこに行けば見つかるの?」

アクヴォ「………わかんない」

シプチャル「はあ!?北とか南とか、わかるでしょー!」

アクヴォ「だってえ…」

レーヴォ、揉める2人の間に割って入る。

レーヴォ「ケンカはだめー!みんな仲よしでいようー!」

シプチャル「目的地がなけりゃ、航海する意味がないじゃないか!」

レーヴォ「あるよー!地球ー!」

レーヴォ、夢見がちにうっとりとする。

レーヴォ「お父さんとお母さん、ずいぶん歳を取って、ずーっと僕を待ってるんだっ

てー!早く会いたいなあ。優しくしてもらえるかな」

シプチャル「全然だめ!君、まだ手ぶらじゃないか」

レーヴォ「それでも行きたいの!行きたい行きたい、いきーたーいー!」

シプチャル「うるさい!誰かほかに行きたいところは!」

ヴィーノ、唐突に立ち上がる。

ヴィーノ「不幸の御殿に行きたい」

アクヴォ「…不幸の御殿?」

レーヴォ「なあに、それ?」

ヴィーノ「この世の全ての幸福が住む花園の隣に、薄い膜が張ってあって、その向(う)には不幸たちが住んでるんですって」

シプチャル「知ってる!前に時のおじいさんが言ってた!」

ヴィーノ「あだし、地球に不幸を持っていききたいの。だから不幸の御殿に行かせて」

シプチャル「今のところ一番いい意見だ。賛成!」

アクヴォ「ええ〜!僕の探し物は!」

シプチャル「もしかしたら不幸の御殿に流れ着いてるかもしれないよ」

アクヴォ「…そっか!」

シプチャル「(レーヴォに向かって) 君もこの子みたいに不幸を買ってあげれば、地球

に行けるよ」

レーヴォ「そっか〜!」

【青い鳥】の未来の国のお話

幸福3 「はじめまして、生まれる前の子供たち！ あたしたちは幸福！」
アクヴォ 「はじめまして？」

幸福4 「初めてのあいさつはみんなこう言うのよ。はじめまして！」
アクヴォ一行 「…はじめまして！」

幸福5 「ああ、うれしい！ また新しい子供に、あたしたちを知ってもらえた！」

(♪幸福たち)

しあわせしあわせ

とっともしあわせ

あたしたち小さな幸せなんです

幸福1 「あたしは健康である幸福！」

幸福2 「あたしは両親を愛する幸福！」

幸福3 「あたしはきれいな空気を胸いっぱい吸い込む幸福！」

幸福4 「あたしはふかふかの毛布にくるまる幸福！」

幸福5 「あたしは柔らかい草原を裸足で駆け抜ける幸福！」

幸福1 「どれも知らないでしょ？」 「ねえ、これから知ってほしいよ！ 地球に生まれたその時
にね！」

(♪幸福たち)

純粹で無邪気な子供たち「は

小さな幸せがいっぱい

大人になっても忘れないでね

あたしたちいつだって傍にいるわ

幸福1 「そうだ！ 喜びたちにも会わせてあげましょう！」 (幸福5に) おまえ、ちょ
っと行ってきて！」

幸福5、頷くと舞台袖のほうへ駆けつけよう。

アクヴォ 「喜びっっっ！」

幸福1 「あたしたちのお姉さんよ！ あなたたちに会ったら、きっと喜ぶわ！」

幸福2 「ねえ！ みんなが来るまで、一緒に遊びましょう！」

アクヴォ 「いっよー！ 何して遊ぶっ？」

幸福1 「そーねえ…まねっ！ 遊びにしましょ！ あたしたちの動きをそのまま真似して
みて！」

幸福とアクヴォ一行のダンスナンバー。最初に幸福が踊りを見せ、子供達がそ
の踊りを真似していく。はじめはステップ程度の簡単な踊りから、次第に複雑
で美しいダンスになっていく。最後は幸福たちと子供たちが手を取り合って楽
しもうっ！ 踊る。

アクヴォ 「あはははっ！ こんな楽しい遊び、はじめてだ！」

【青い鳥】の未来の国のお話

レーヴォ「帰ったら、他の子供たちにも教えてあげようねー!」

そこへ幸福5が走って戻ってきて、舞台上に現れる。

幸福5「みんな! 喜びたちよー!」

幸福1〜4「(はしゃぎ声)」

幸福1〜5が嬉しそうに舞台袖へ駆けていく。しばらく間をおいて、幸福たちと入れ替わりに喜び1〜4が舞台上へゆっくりと現れる。アクヴォ一行は揃って喜びたちの美しさに見惚れている。

ヴィーノ「あれが喜び…? なんて綺麗なの…!」

最後にパトリーナが現れ、一行のもとへゆっくりと歩み寄ってくる。

シプチャル「ねえ見て! あの一番綺麗な喜びー!」

アクヴォ「…僕…あの人を知ってる気がする…」

レーヴォ「僕も!』はじめまして』じゃない気がするー!」

パトリーナ「それは私がいつこんな時も、お前たちのことを想っているからですよ
アクヴォ「…お母さん…?」

パトリーナ、優しい微笑みを浮かべて腕を広げる。

パトリーナ「私は母の愛の喜び。お前たちとは地球で初めて会うはずだったのに…こんなに早く会えるなんて、嬉しいわ。こっちへいらっしゃい。キスをしてあげましょー!」

一行、揃ってモジモジしている。

パトリーナ「(笑いながら)何をそんなモジモジしてるんです。さあ、おいで!」

アクヴォ、勇気を出してパトリーナのもとへ歩み寄る。

パトリーナ、アクヴォの頬に両手を添えて、額にキスする。

パトリーナ「ここまでするのには疲れたでしゅー。よく頑張ったわね!」

アクヴォ、笑顔になってパトリーナに抱きしめる。すると他の3人が我先にとパトリーナに抱きつきにやってくる。

レーヴォ「僕も! 僕もキスしてー!」

シプチャル「僕が先〜!」

ヴィーノ「あたしだってー!」

パトリーナ「うふふ、そう急かすんじゃないませと!」

【青い鳥】の未来の国のお話

喜び1〜4のコースが入る。その間、パトリーナがレーヴォ、シプチャル、ウィーノの順で額にキスしていき、4人まとめて抱きしめる。

(♪喜びたち)

この世で最も清らかな喜び

それは母の愛

子供達を優しく包む

無償の愛の喜び

パトリーナ「…それにしても、どうしてここに来たの？ 時のおじいさんに知られたら

大変よ」

アクヴォ「僕が星の海に大切なものを落としちゃったんだ。それを探したくて…」

シプチャル「それは後って話だったでしょ。僕たちはまず不幸の御殿に行って…」

パトリーナ「(シプチャルの言葉を遮って) なんですって…!」

急に怒りの形相になるパトリーナ。アクヴォ一行、驚きの表情。

パトリーナ「不幸の御殿なんて! あんなみっともないところ、行くものじゃありません

ん…穢らわしい…」

驚きのあまり、まずレーヴォが最初に泣き出し、伝染するやうに他3人も泣きじゃくの始める。パトリーナ、すくなく優しい表情と語の口調に戻る。

パトリーナ「ああ…ごめんなさい。怒ってるんじゃないのよ。でも、不幸の御殿は、

それはもう恐ろしいところなの。まだ生まれる前のお前たちが行ってはいけな

いわ」

ウィーノ「でも…でもあたし…あたし…」

パトリーナ「お前たち、少し疲れてるのね。(こづけばはく休んでいくといわ。さ、

横におおな

まずパトリーナがその場に座り、パトリーナを半円状に囲うやうに子供たちが

横になる。パトリーナ、子供たちの頭を撫でながら、子守唄を歌い始める。

(♪パトリーナ)

眠れ眠れすいすい

可愛い寝息を立てながら

しーヴオ「『眠の』眠の』って、どつやってやめよのの。」

パトリーナ「目を閉じて、私の歌をしっかりと聞けば、すくなく眠れるわ」

(♪パトリーナ)

眠れ眠れ可愛く

楽しい夢を見ておくれ

いつか生まれる日の夢を

【青い鳥】の未来の国のお話

パトリーナ「では名残惜しいけど…。お前たち！そこそこ起きななな」
レーヴオ「え…もうちよっとだけ…」

パトリーナ「いけませんよ。そのうちに時が戻ってきてしまっ

アクヴオを皮切りに、子供達が眠たそうにあぐらをしたり目をこすりながら起き上がる。

アクヴオ「頭の中がふわふわして、体がぼかぼかする…。眠るって、とっても気持ちいいことなんだね！」

レーヴオ「地球にいったら、もっとたくさん眠りたい！」

パトリーナ「さあ、ちゃんと背筋を伸ばして、こっちへおいで。お別れのキスをしてあげましょっ」

アクヴオ一行「…お別れ!?!」

パトリーナ「ええ…お別れ」

レーヴオ、真っ先にパトリーナに抱きついて駄々をこねる。

レーヴオ「やだやだやだ！僕まだここにいたい！お母さんと一緒がいい！」

パトリーナ「ダメよ。地球の私がいつまで経っても、お前たちに逢えないでしょう？」
レーヴオ「そんなのやだーっ…！」

リバーシ、大きく手を挙げて『やれやれ』のポーズ。アクヴオ、1人だけ他の喜びと雰囲気が違うリバーシを不思議そうに見る。

パトリーナ「この自由に生きる喜びが、お前たちを未来の王国に送り届けてくれます
ヴィーノ「だめよ！まだ不幸の御殿に行っていないのに…」

パトリーナ、溜息の後にヴィーノの肩を優しく撫でながら、

パトリーナ「あんなところに行ったら、碌なものを得られないわ」

ヴィーノ「でも！」

シプチャル「…お母さんの言うことを聞いた方がいいんじゃないっ？」

アクヴオ、ヴィーノ、レーヴオ、一斉にシプチャルを見る。

シプチャル「僕たちよりずっと大人で、いろんなことを知ってるんだから。年長者には従え、って時のおじいさんも言ってた！」

レーヴオ「…よくわかんないけど、お母さんのいうことだから、きっと正しいんだよ

ねっ」

パトリーナ「そっゆ。お母さんの言うことをきかんと聞いていれば大丈夫！」

ヴィーノ、助けを求めるようにアクヴオを見る。アクヴオもまた迷っている様子で、見るからに狼狽している。

その様子を見ていたリバーシ、深々とため息をついて、

【青い鳥】の未来の国のお話

リバーシ「ハッ、呆れちまうぜ！ 誰がどこに行こうが、そいつの自由だつてのに。…
ここはこの自由に生きる喜びの出番、ってわけだな！」

リバーシがアクヴォとヴィーノの間に割って入る。

リバーシ「なあ子供達！ 早くお母さんにキスしてもらいな！」

リバーシがアクヴォ・ヴィーノの2人と肩を組む。その際、2人にしか聞こえないように囁き声で…

リバーシ「今は言いつくしを聞いておけ。いいな。」

アクヴォとヴィーノ、驚きの表情。リバーシはそのまま2人をパトリーナのものとへ連れていく。

パトリーナ「さようなら。逢えて嬉しかったわ、私の子供たち」

アクヴォ一行の額に次々とキスを落としていく。全員にキスし終わると、リバーシが首からぶらさげている笛を吹いてアクヴォ一行の注目を集める。

リバーシ「では諸君！ 未来の王国まで、しゅっぱーっ！」

マーチ風の音楽が流れ、リバーシがどこからともなく手持ちのフラッグ（添乗員さんが持っているようなやつ）を取り出し、笛を吹きながら子供達を誘導し舞台袖へ。パトリーナと喜び1〜4は穩やかに手を振って一行を見送る。

パトリーナ「気をつけて！ 星の海に落っこちないようにね！」

リバーシとアクヴォ一行が行進風のダンスを踊りながら、舞台上をぐるぐると回って練り歩く。その最中に場面転換し、幸福の花園↓不幸の御殿の入り口手前へ。

4. 不幸の御殿

舞台転換が完了後、リバーシが笛を鳴らして一行を止めさせる。

リバーシ「なあ、着いたぞー！」

アクヴォ一行、あたりをきまよるきまよると見回すが、不思議そうな顔。

シプチャル「ここは未来の王国じゃないよ！ まだ船にも乗ってないじゃないか
リバーシ」当たり前だろ。ここは不幸の御殿の入り口だ」

アクヴォ一行「…ええっ？？」

【青い鳥】の未来の国のお話

リバーシ、舞台奥をすっと指差して、

リバーシ「あの真つ暗な穴の向こう！ あそこをすーっと突っ切っていくと、そこに不幸の御殿がある。この世のありとあらゆる不幸、そして悲しみが住んでいる！」

シプチャル「でもお母さんが行ったらダメっつー」

リバーシ「ダメダメダメダメ！ あれもダメ、これもダメ、それもダメ！ ああ、なんて不自由！ そんなの、この自由に生きる喜びが許すと思っただかー？」

呆気にとられるアクヴォー一行たち。「ここでリバーシのソロナンバーに入る。

(♪リバーシ)

昔はちっぽけな喜びだった

それが今じゃごうだ

グンと背が伸びて大きくなった

見ろよ脚だっつてこんなに長い！

ある日突然人間は気づいたのさ

この世で一番素晴らしいもの

それは…

そう！ 自由！

なんて素晴らしい！

ああ！ 自由！

それは人々の希望！

どこに行っただっていい

何を食べただっていい

誰かに何を言われようよ

「クソ喰らえー！」って笑い飛ばせばいいー！

誰を愛したっていい

未練たらしくてもいい

男になろうと女になろうと

好きなように生きればいいー！

がんじがらめの人生ほど返屈なものはない

ほら気付けよ！ 私たちはこんなにも自由！ 自由！

(♪アクヴォー一行・コーラス)

ああ自由

(♪リバーシ)

なんだっつて

【青い鳥】の未来の国のお話

(♪)アクヴオー行・コーラス
そう自由

(♪)リバーレ
できるのわ

(♪)アクヴオー行・コーラス
ああ自由自由

(♪)リバーレ
何にも縛られない
自由な生きざま!

リバーレ「不幸の御殿に行きたいなら、行けばいい！ そうする自由がお前たちにはあ

る！」
シプチャル「でも、でもー！」
ヴィーノ「…あたし行くー！」

ヴィーノ、一人でさっさと舞台奥(洞穴の向こう)に走ってらへ。

アクヴオ「あっ、待って！」

アクヴオもヴィーノを追って洞穴の向こうへ。

シプチャル「ちよっと！勝手に行っちゃダメだよ！」
リバーレ「どんどん勝手に行け！それでこそ自由！」
シプチャル「そういうのは無責任って言うんだよーっ！」

リバーレ、シプチャルに向かって不敵な笑み。

リバーレ「いいねえ！それもまた自由の形！」

(♪)シプチャル・レーヴオ
ああ自由

(♪)リバーレ
自分勝手

(♪)シプチャル・レーヴオ
そう自由

(♪)リバーレ
無責任だと

【青い鳥】の未来の国のお話

(♪) シプチャル・レーヴオ
ああ 自由 自由

(♪) リバーレ
指をさされても
それはそいつの自由！

リバーレ「さあ行くぞ子供たち！不幸がお前たちを待っている！」

リバーレ、さっそうと洞穴の奥へ。シプチャルとレーヴオ、うろたえつつも先に行った3人を追って洞穴の奥へ駆けていく。不幸の御殿の入り口手前↓洞穴の中に場面転換しつつ、音楽がどんどん不穏なものへ転調。

5. 洞穴の中

洞穴の中を彷彿とさせる暗い色調の照明が舞台上を照らし、不幸1〜5が舞台上に登場。ソングを彷彿とさせるおどろおどろしい動きで舞台上を練り歩く。

(♪) 不幸たち
辛い 悔しい 悲しい
人の世は不公平
怒り 恨み 妬み 嫉み
人の世は理不尽

俺たちがいったい何をした
どんなに嘆いても知らんぷり

ああ不幸 なんて不幸
俺たちとっても不幸

舞台奥からヴィーノが現れ、少し遅れてアクヴオも現れる。

アクヴオ「待ってー！一人でいったら危ないよ」
ヴィーノ「暗いわ…！不幸は、不幸はどこ？」
不幸1〜5「ウヒヤヒヤヒヤヒヤー！」

アクヴオとヴィーノ、驚いて2人同士でくっついて、あたりをきよきよ見回す。不幸1〜5、アクヴオとヴィーノの周りをぐるぐる回って、だんだん距離を詰めていく。

アクヴオ「だっ、誰だー！」

不幸1「こいつは驚いた！こんなところに生まれる前の子供がいるぞー！」

不幸2「俺たち不幸を唾にきたのか？」

ヴィーノ「あなたたちが不幸なの？」

不幸3「そうさ！俺はひとりぼっちの不幸！家族もなく、友達もなく、恋人もなく、たったひとりで孤独に死んでいくのさ！」

不幸4「あたしは他者を妬む不幸。ああああ！あたしよりあいつの方が高価で綺麗な服を着ている！キィーッ、妬ましいー！」

不幸5、激しく咳き込みながらアクヴォとヴィーノに縋りついてくへん。

不幸5「(激しく咳き込んで)わしは病苦の不幸…。ああ辛い、頼む、いっそ楽にしてくれ…」

アクヴォとヴィーノ、怯えきった様子で不幸5を突き飛ばして逃げ出す。

不幸1〜5「ひゃはははははー！」

不幸1「どこに行くんだい、おチビさん？」

不幸2「せっかく来たんだ、ゆっくりしていけよー！」

恐怖のあまり言葉が出てこないアクヴォとヴィーノ。するとそこへリバーシ、シプチャル、レーヴォが遅れてやってくる。シプチャルとレーヴォは周りの雰囲気ですっかり怯えている。

リバーシ「おお！さっそく不幸たちに会えたか！」

アクヴォ「喜びさんっ！」

アクヴォとヴィーノ、リバーシのもとへ逃げ込む。

リバーシ「怯えてるのか？安心しろ、不幸も幸福も大した違いはない！」

アクヴォ「全然違うよ！この不幸たち、汚くて不細工だし、みんなとっても怖い！」

不幸1「そいつは心外だな！俺たちはこーんなにも子供たちが大好きなのに！」

不幸2〜5「そうだそうだ！」

いっそう怯えるアクヴォ一行。レーヴォは堪えきれずに泣いてしまふ。

レーヴォ「うええええん…！」

シプチャル「やっばりお母さんが正しかったんだ！早く帰ろう！」

アクヴォ「(ヴィーノに向かって)この子の言つとおりだよ！不幸なんて、地球に持っていかない方がいいー！」

ヴィーノ、葛藤の表情。

リバーシ「迷っくらいなら進め！後悔したっていいじゃないか、それも自由だからでねんじやだー！」

リバーシ、子供たちの背中を強く押して、不幸たちの中心に突き飛ばす。

【青い鳥】の未来の国のお話

リバーレ「膜の向こうの兄弟たち！この子たちに不幸を教えてやってくれ！」
不幸い〜ら「ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

リバーレが笑いながら舞台奥へ引っ込んでいき、不幸たちのダンスナンバーが始まる。激しい曲調の曲と共にダンサーが舞台上へ現れ、子供たちを脅かしながら踊り出す。

(♪不幸たち)

ああ不幸 なんて不幸

この苦しみ 誰にもわかりやしない
許すものか！ 思い知らせてやる！

怯えながら逃げ惑うアクヴォー一行、ところが逃げ道の先に不幸が待ち構えていて、子供たちを脅かしてくる。

リヴォ「もうやだあ！ぼく未来の王国に帰りたい！」

シプチャル「うるさいなあ！泣くなよ、ばか！ううう……！（泣き出す）」

アクヴォ「みんな、しっかり！来た道を戻れば大丈夫だから！」

シプチャル「こんな真っ暗じゃ道なんかわかんないよ！（ヴィーノに向かって）ぜん

ぶ君のせいだからな！」

ヴィーノ「……」

アクヴォ「……どうして不幸なんか、持ってきたかったの？」

沈黙するヴィーノ。そこへ再び不幸が脅かしに来て、子供たちが逃げ惑う。

するとそこへパトリナそっくりの不幸（ミストラクト）が舞台上へ現れる。

(♪ミストラクト)

ああ可愛い子こっち入おごご

お母さんが守ってあげる

ほらこの腕の中へおごご

リヴォ、ミストラクトを見て、

リヴォ「お母さんー」

リヴォ「お母さん、お母さん、お母さん、お母さんー」抱き着く。

リヴォ「お母さん、お母さん、お母さん、お母さんー」

(♪ミストラクト)

ああ可愛い子泣かぬごご

お母さんが傍にいらぬごご

【青い鳥】の未来の国のお話

レーヴォ「(ますます泣きながら) 助けてお母さん！ 僕怖いっ！」

(ママミストラクト)

お願いよ泣きやんで

どうしてそんなに泣いてるの？

静かに早く泣きやみなさい

レーヴォ「うわあああんー！」

ミストラクト「…うるさああああいー！……！」

ミストラクト、レーヴォを突き飛ばす。驚きのあまり腰を抜かすレーヴォに、他の人が慌てて駆け寄る。

ミストラクト「なんで泣き止まないの！……泣くなって言ってるのが聞こえない

のー？」

(ママミストラクト)

「子供は小さくてかわいい守ってあげなさい」

あたしだってそう思いたかった

だけど…どうしたって無理なの

泣き声は耳障り笑顔も不細工

汚くてうるさくて気持ち悪い

全てがあたしを苛立たせる

子供なんて愛せない！

ミストラクト「いっそお前たちなんか、一生生まれてこなければいいんだ！ あたしの

前からさっさと消えなさい！ 消えろおおおー！」

激しくショックを受けているレーヴォ、その場から逃げられず泣いてしまう。

レーヴォにつられるようにシプチャルも泣き出して、その場に縮こまる。ヴィ

ーノは茫然として立ち尽くし、アクヴォは唯一我を失わず、3人を守ろうと不

幸たちに向かいあっている。不幸たちとダンサーは子供たちへじりじりとじ

り寄る。

(♪不幸たち)

ああ不幸 なんて不幸

この苦しみ 誰にもわかりやしない

許すものか！ 思い知らせてやるー！

アディーア「おやめー！」

不幸たちが動きを止める。子供たち、恐る恐る顔を上げて、舞台奥を見上げる。するとそこから不幸たちの中でひときわ美しいアディーアが現れる。

【青い鳥】の未来の国のお話

アディーア「悪趣味な遊びはそこまでよ。まあ、お行き。…お行きったらー！」

不幸たちとダンサー全員、しぶしぶといった様子で舞台袖へ。ミストラクトは最後までアディーアを睨みつけるが、アディーアが舞台袖の方をすっと指さすと、不満げに鼻を鳴らして引っこ込んでいく。

舞台上がアディーアとアクヴォー行だけになると、アディーアが優しい笑みを浮かべながら一行のもとへ。

アディーア「驚かせてごめんなさい。洞穴の中でいつも退屈してるから、遊びたかっただけなのよ」

アクヴォー「…あなたはひよことして喜びっ」

アディーア「…いいえ。遙か昔、喜びだった時もあったけれど…。さっきの不幸たちよりは、少しばかり品があるだけ」

一行、お互い支えあいながら立ち上がって、アディーアに向き直る。

アディーア「私は愛する者を失う悲しみ。お前たち生まれる前の子供がまだ知る由もない、深い深い悲しみよ」

アクヴォー、アディーアのもとに歩み寄り、

アクヴォー「助けてくれてありがとう…」

アディーア、アクヴォーを見つめながら、突然涙を流し始める。

アクヴォー「悲しみさん、泣いてるのっ。どうしてっ」

アディーア「お前を失った悲しみで涙する者が、この世のどこかにはいるからっ」

アクヴォー「…誰だろう？ 未来の国で待ってる。あの子かなっ」

アディーア「いいえ。お前の母になろうとして、なれなかった者のことっ」

アクヴォー「僕のお母さんに？ どうしてなれなかったのっ」

アディーア「さあ…私はただの悲しみですから、それはわからない。罪の海の最果てにいるといわれる『生』ならば、答えを持っているかもしれないっ」

アクヴォー「生ってっ」

アディーア「地球に生まれる全ての命を作り出した存在。それぞれの命が生まれる時を定めたのも生だと聞いたことがあるっ」

ウィーノ、アディーアの言葉に反応を見せる。

アクヴォー「…そこに行けば、僕が生まれられなかった理由もわかるのかなっ」

アディーア「もしかすると、そっかもしれませぬね。…それなら、こんなところへ集

居するものじゃないわ。あの喜びのもとまで、送ってあげませっ」

ウィーノ「…待ってー」

全員視線がウィーノに集まる。

【青い鳥】の未来の国のお話

ヴィーノ「…まだ不幸を手に入れてない！」

シプチャル「呆れた！まだあんなものが欲しいの！？」

ヴィーノ「あなたにはわからない！あたしは誓ったの、地球で一番不幸なものになる
ってー！」

アディーア、めっくろとヴィーノに近づいてく。

(♪ヴィーノ)

約束したのよ

無邪気に笑って

『ふたりは永遠に離れない』と

でもあなたは行ってしまった

遠く遠く青い惑星(ほし)

あたしの手の届かぬ場所へ…

アディーア「…お前はまた生まれてもないのに、私のことを知っているんですね」

頷くヴィーノ。そこからヴィーノの回想に入る。

舞台全体の照明が溶暗、ヴィーノとアディーアにピンスポ、舞台奥をピンスポで照らすと、そこに時のおじいさんが立っている。かつて未来の王国で恋人同士だった子供が地球に生まれに行った日の様子。

時 「儂の目をごまかそうとしたって、そうはいかんぞ。さあ、お前の恋人にお別
れを言うんだ」

ヴィーノ、祈るように手を握り、客席側に向かって、

ヴィーノ「時のおじいさん、お願いです！この人をあたしと一緒に残してください！
あたしが地球に生まれるのはまだうんと先のことです！その時…この人はもう、
地球からいなくなってしまうかもしれない！」

時 「それは儂の知ったことじゃない。そんなことは生のところへ行って頼むんだ
な！…もうあと3994秒しかない！…やあやあ！」

時のおじいさんが手を差し出すと、ヴィーノが激しくかぶりを振りながらその
場にしゃがみこむ。

ヴィーノ「イヤー！お願い、この人を連れて行かないで！あたしをひとりにしなさい！」

時、憐みの瞳でヴィーノを見つめ、諭すように語る。

時 「…死に行くんじゃないぞ。生まれに行くんじゃないか。…やあ」

ヴィーノの恋人が連れて行かれる瞬間。ヴィーノ、追いつがるように前に手を

【青い鳥】の未来の国のお話

伸ばす。時のおじいさんがヴィーノに背を向けると、時のおじいさんを照らしていたピンスポが溶暗し、ヴィーノとアディーアだけが照らされている。

ヴィーノ「…せめて…せめてしるしを残してよ！あなたをどうやって見つけたらいいか教えてー！」

舞台奥が再びピンスポで照らされる。そこにヴィーノの恋人だった子供が、背中を向けて立っている。

ヴィーノの恋人の言葉を、アディーアが代わりに喋る。

アディーア「…僕はいつだって、君のことを愛しているよ」

ヴィーノ、絶望して深く頭垂れる。

ヴィーノ「…あたし、地球で一番不幸なものになって生まれてくるわ。そうすれば、あたしがわかるでしゅっ」

2人の歌唱ナンバー。舞台奥のピンスポは溶暗していく。
アクヴォ・レーヴォ・シプチャルは茫然と2人を見つめている。

(♪アディーア)

永遠なんてない

陽はやがて昇り

残酷な時が全てを奪い去る

(♪ヴィーノ)

しるしすら残らない

まどろみに消えてゆく

あの笑顔あのままに

忘れたくないのに

(♪アディーア)

愛する喜びのままにいらしたら

どんなに幸福でしゅっ

(♪ヴィーノ&アディーア)

ふたりのきりの世界

それ以外なにもいらなかった

(♪ヴィーノ)

『行かないで』

もう届かない声で叫んでも

二度と夢は戻らない

やがて声も枯れ果てて

【青い鳥】の未来の国のお話

残るのは胸の痛み
別れの悲しみ…

(♪ヴィーノ&アディーア)
やがて涙も枯れ果てて
残るのは胸の痛み
別れの悲しみ…

舞台全体の照明が溶明。アクヴォはヴィーノをじっと見つめ、レーヴォとシプチャルは何が何だかわからないといった様子できょろきょろしている。
アディーア、うずくまっているヴィーノのもとに跪く。

アディーア「ポケットの中をご覧。お前はもう、私の欠片を持っている」

ヴィーノ、驚きの表情で顔をあげ、ポケットの中を探る。そこには青い液体の入った小瓶が入っていた。

アディーア「哀れな子…不幸も悲しみも、気付かないことだっただけきぬさ」

アディーアの手を借りてヴィーノが立ち上がる。

アディーア「もうここに用は無いわね？さあ、行きましよう」
ヴィーノ（少し間をおいて頷く）

アディーアとヴィーノが先に舞台奥へ。レーヴォとシプチャルが慌ててそれを追いかけて、アクヴォは去っていく2人の背中を見つめてから、一番最後に舞台奥へ消えていく。舞台全体が溶暗し、洞穴の中↓不幸の御殿の入り口手前場面転換。

リバーシの歌唱ナンバーのワンフレーズが流れ、照明が溶明。上機嫌な様子で岩場に腰掛けるリバーシの姿が徐々に明らかだ。

(♪リバーシ)
ああ自由！
なんて素晴らしー！
そう自由！
果てない喜びー！
ああ自由自由〜♪

アディーアに連れられたアクヴォ一行が舞台上へ現れる。

レーヴォ「あー！いたーっ！」

リバーシ、一行に気付いて嬉しそうな笑顔。

【青い鳥】の未来の国のお話

リバーレ「やあ、子供たち！不幸の御殿はどうだった？」
シプチャル「最悪！来るんじゃなかった！」

アディーア、キッとリバーレを睨みつけて、

アディーア「あんたとこの子供たちを置き去りにするなんてー」
リバーレ「この子供たちが望んだことだ！自由を尊重して何が悪い？」
アディーア「…我欲を満たすことを喜びだと思っているのなら、いずれ膜のこちら側に来ることになるわ」

リバーレ「どこに行くか、何になるか、誰の味方をするか。決めるのは私だー」
レーヴォ、睨みあう2人の間に入って仲裁する。

レーヴォ「喧嘩しないで！僕、みんな仲良しがいいー」
リバーレ「安心しろー！これは単なる価値観のぶつかり合いだ」
レーヴォ「そっか！喧嘩じゃないならよかったー」

アディーア「…仮にも喜びならば、善きことをなさい。この子供たちを未来の王国に送り届けるんでしょ？」
リバーレ「…まった／＼、悲しみの／＼せ！ロウエンの奴だー」

アクヴォ、アディーアの前に向き直って、

アクヴォ「悲しみさんは一緒に来てくれないの？」
アディーア「お前たちの傍にいるには、私は醜ましいの」
アクヴォ「悲しみさんは綺麗だよー」
アディーア「ふふふ…ありがとっ」
アクヴォ「…また会える？」
アディーア「いつかお前が地球に生まれたなら、或いは」

アクヴォ、背伸びしてアディーアの額に別れのキスをする。（パトリーナにキスされた時と同じように）

アクヴォ「…さようなら。元気でねー」
アディーア「…さようなら、子供たち。二度と会わないことを祈ってるわ」
アディーア、舞台袖へ。最後にヴィーノと目を合わせて、じっと見つめあってから、舞台上を去っていく。
ヴィーノ、ポケットの中から小瓶を取り出して、それを見つめる。レーヴォとシプチャルが興味深そうに小瓶を覗き込む。

レーヴォ「きれいー！何が入ってるの？」
ヴィーノ「あの悲しみの欠片だ」
シプチャル「ってことは…君は地球に行ったなら、愛する者を失うってことかー！」

【青い鳥】の未来の国のお話

ヴィーノ「違いわ。もう失ってるの」

ヴィーノ、小瓶をぎゅっと握り締め、遠くを見つめる

ヴィーノ「…やっぱり…あたしたち…二度と逢えないのね…」

(♪ヴィーノ)

『愛してる』

もう届かない声で叫んでも

二度とあなたに逢えない

やがて涙も枯れ果てて

残るのは胸の痛み

別れの悲しみ…

歌い終わると同時に崩れ落ちて泣き叫ぶヴィーノ。

レーヴォ「あーあ、まただよ」

シプチャル「どうして泣くのさー！君が行きたがったんじゃないか」

アクヴォ、ヴィーノに歩み寄って、そっと背中をひすする。

アクヴォ「…泣かないで」

ヴィーノ、顔をあげる。

アクヴォ「なんでかわからないけど…泣き声を聞くの、嫌なんだ。君のコイビトだって、君が泣いているのは嫌だと思っ」

ヴィーノ「…あの人はもう、あたしのことなんか覚えてない。…でも…」

ヴィーノ、アクヴォに支えられながら立ち上がり、アクヴォと向き合う。

ヴィーノ「…ありがとう…」

アクヴォ、ほっとした笑顔。

リバーレ「さあ子供達！次はどこへ行く？人間の思い出たちが暮らす思い出の国でも、こわい女王が鎮座する夜の宮殿でも、地球のすぐ傍にある沈黙の国でも、どこへだって自由に行けるぞー」

アクヴォ一行、顔を見合わせる。

レーヴォ「…僕…未来の王国に帰りたい」

シプチャル「地球に行きたいんじゃないの？」

レーヴォ「そっだったけど…もし地球にいるお母さんが、あの不幸みたいな人だった

【青い鳥】の未来の国のお話

ら…僕生まれぬ方がましだ！」

ヴィーノ「(アクヴォに視線をやりながら)もともと、この子の落とし物を探すための旅でしょ。(アクヴォに対して)あなたはどうしたいの?」

アクヴォ「僕は…(リベールに対して)ねえ、星の海の最果てって、ここから遠いの?」

リベール「そりゃあもう、あの地平線の更に向こうだからな。だが行き方は簡単だ。

ただ真っ直ぐに突き進めばいい」

アクヴォ、少し考え込んだあと、顔を上げて、

アクヴォ「…僕は…あの悲しみさんが言った、生の国に行くんだ」

シプチャル「…バカだなあ！そっとうっとうっしてる間に、時のおじいさんが戻ってきちゃう

よー」

アクヴォ「でも…そこにいけばわかる気がするんだ！僕がなにを失くしたのか、なんであげほのから落ちたのか。…どっして地球のお母さんのところにいけなかったのか！」

リベール、嬉しそうにアクヴォの肩を組む。

リベール「素晴らしい！旅路は長ければ長いほどいい、それじゃ自由！」

アクヴォ「そうなの?これって自由」

リベール「そう！(歌)ああ、自由、自由」

ヴィーノ「(歌を遮りながら)あたし、賛成！」

アクヴォ「ほんとう?」

ヴィーノ「ええ。一緒に行きましょ、星の海の最果てへ！」

アクヴォ「(リベールを見て)君はどっする?先に帰る?」

リベール「…行く！もう怖いのは嫌だけど…みんなと一緒にいるのは、楽しいもん！」
アクヴォ「…ありがとう！」

その場にいる全員がシプチャルを見る。シプチャル、居心地が悪そう。

シプチャル「…んもっ、仕方ないなあ！耐久実験もしたかったし、僕の船を使わせ

てあげるよー」

アクヴォ「…ありがとう！」

シプチャル「時のおじいさんに怒られたら、君のせいだって言うからね！」

アクヴォ「うん！僕のせいだもん！」

シプチャル「…調子狂う〜〜！」

リベール、手持ちフラックを取り出して、子供達を見渡しながら、

リベール「では子供達、船に乗り込め！目指すは星の海の最果て、生の淵源！宇宙で

最も自由な旅の始まりだ！」

シプチャル「ちよっこ！船長は僕！」

【青い鳥】の未来の国のお話

リベールを先頭に行進しながら歌唱ナンバーに入る。行進の途中、アクヴォだ
け道を逸れて舞台前面へ。

(♪アクヴォー行&リベール)
探しに行こう船に乗って
星の海の果て生のもとまで
こども僕らには大き過ぎる冒険
さあ旅に出よう生まれる前に

アクヴォにピンスポ。アクヴォのソロナンバーに入る。

アクヴォ「…生…そこまで行けば、きっと…」

(♪アクヴォ)

靡げな記憶を辿ればかすかに思い出す
地球は青くて
手を伸ばせば届きそうだった

あの星に生まれたかった
それなのにどうして…?

僕はわからないことだらけ

ねえお母さん

どうしてあなたに会えないの…?

ねえ時のおじいさん

いつになったら地球に行けるの…?

ねえ喜びさんと悲しみさん

生まれることは幸福…

それとも不幸なこと…?

僕はわからないことだらけ

もしも地球に生まれれば

探し求めてた答えが

いつか見つかるのかな…?

それとも永遠にわからないまま…?

僕はわからないことだらけ

ピンスポが溶暗。

急に叫び声をあげるシプチャルに驚く他4人。シプチャルに駆け寄る。

アクヴォ「どうしたの!?!」

シプチャル「ぜ、ぜ、ぜ…前方!前方に…!」

ヴィーノ「何があるの?」

シプチャル「…何にもないんだよ…!」

リバーシ、身を乗り出して覗き窓から前方をのぞき込む、

リバーシ「何もなくはないぞ、あの音を聞いてみろー」

子供たち「音…?」

一行、耳を澄ませる。すると徐々に滝の流れる音が聞こえてきて…

レーヴォ「これ、何の音?」

リバーシ「決まってるだろう!滝の音だ!」

子供たち「…滝い…?」

シプチャル「嘘だ!滝って川とか湖とかにしかできないんでしょー」

リバーシ「海に滝があって何が悪い!それは海の自由だろう!」

ヴィーノ「このまま進んだら、あたしたち滝の下に賣っ逆を井って…!」

シプチャル「す、すぐに進路を変えないと…!」

リバーシ「大丈夫だ!このまま突っ切れ!」

子供たち「…はあ…?」

リバーシ「生の淵源は星の海の最果てにある。だが海はあそこで終わる。し井る、

あの滝の下こそが私たちの目的地」

アクヴォ「本当…?」

シプチャル「もし違かったらびびり出すのさー!いいから引き返すよー!」

リバーシ「おいおい、!」

リバーシ、シプチャルから操縦桿を奪う。

シプチャル「あ…!」

リバーシ「お前たちはどこかに掴まって!」

シプチャル「返して…!このままじゃ船が落ちちゃっ!」

どんどん滝が近づいていき、滝の流れ落ちる音がどんどん強くなる。

レーヴォ「やだやだやだ!もう帰ろうよ、怖いよー!」

ヴィーノ「こんな高いところから落ちたら死んじゃうわー!」

リバーシ「安心しろ!お前たちはまだ生まれてないんだから、死ぬこともない!」

シプチャル「そんなんで安心できるわけないでしょー!」

アクヴォ、近くににいる子供たちを自分のものに引き寄せながら、

【青い鳥】の未来の国のお話

アクヴオ「あなたが？ おじいさんが僕たちを助けてくれたの？」

生 「ああ、ここに流れ着いたものを釣り上げるのが、わしの仕事じゃからの」

生の釣り竿に何か引っかかる。

生 「おっ、かかったー！」

生が立ち上がって釣り上げようとしますが、なかなか獲物が釣り上がらない。

生 「こいつはでかいー！（釣りに奮闘中）」

ようやく獲物を釣りあげるが、釣り糸の先にはリベリーの靴の片方が引っかかっている。

生 「なんだ、靴か」

アクヴオ「ひよっとして…あの滝、このおっきい水たまりに繋がってるのっ。」

生 「ほっほっほ…ああ、そうじゃよ。ここが生の淵源。すべての命はここから生まれて、未来の王国に届けられ、やがて地球へ行く。…生まれることができず、あけぼのから落ちた子供たちもまた、ここに行き着く」

アクヴオ「えー？」

生 「まあ、二度も来たのはお前さんが初めてだがのう。あの時も、あそここの滝から真っ逆さまに落ちてきて、淵にぶかぶか浮いってしまったから、わしがこの竿で釣り上げてやった」

アクヴオ、生のもとへ駆けて行って、

アクヴオ「あの！ 僕の落とし物、知りませんか！ 前、地球に行く途中に落としちゃって、ずっと探してるんだ！ ここに来たら、何かわかるんじゃないかと思って来たんですー！」

生 「落とし物…ああー！ これのことかね？」

生、ゆったりとした動きで釣り竿を置き、ガラクタの山の中をいそいそと漁ります。しばらくすると、空き瓶をひとつ取り出して、アクヴオ「差し出すよ。」

アクヴオ、空き瓶を受け取るが、中に何も入っていない。

アクヴオ「違うよ、これ空っぽじゃないか！ 色んなものをたくさん詰め込んだー！」

生 「じゃが、せっかくわしが綺麗に釣り上げたのに、中身はお前さんが捨ててしまったじゃないか」

アクヴオ「…ほへがっ？ そんなことするはずないよー」

生が再び釣りに戻る。

生 「のう、全部その淵にぶちまけおった。ついこの間、心疾患を釣り上げたがのう」

【青い鳥】の未来の国のお話

アクヴォ「…シンシッカン？なにそれ？」

生がアクヴォに振り返って、

生 「心臓の病気じゃよ。それ以外にも、ありとあらゆる病気を空き瓶いっぱい詰めておったが、そいつらはまだ水底に沈んだままじゃ」

アクヴォ「…僕、病気だったの？」

生 「地球に行った暁にはそうなるはずだった。じゃが…生まれる前にお前の母親が追い返しよった。そしてお前はここに流れ着いた」

アクヴォ「……」

アクヴォ、生の言葉を受け止めながら、立ち戻る。

(♪アクヴォ)

生まれたらもし生まれたらこれを持っていくんだ
ずっと昔そんなことを考えていたんだ

誰にも横取りされない僕だけのギフト…
空き瓶いっぱい詰め込んだくさんの病気

アクヴォ、客席側に向き直って、空を見つめながら歌う。

(♪アクヴォ)

ああ思い出したよ
誰かの泣き声が聞こえたんだ

泣かないでって言うたくて
僕は夢中で船を飛び出した

リバーシ(OFF)「おーすー」

そこへ舞台袖からリバーシ(片足だけ靴を履いてない)がやってきて、アクヴォを睨む。近づく。近づく。

リバーシ「やっと思っけたぞー子供たちぢや、や、無事で何やそのー」

アクヴォ「喜びやぞー」

リバーシ「ん？お、そのひげもじゃーそれは私の靴だぞー」

アクヴォ「ひげもじゃやなら、や、生のおじいさんだぞ」

リバーシ「…なんだってーっ」

生 「むっきのこ釣ったんぢやや(靴を差して出て行く)ほぞ」

リバーシ「なるほぞー！あなたが生といっことは、こは生の淵源かー」

リバーシは意気揚々と靴を受け取って履き直す。

リバーシ「はじめまして、私は自由に生を喜び。会えて光栄だー」

【青い鳥】の未来の国のお話

レーヴォ「なんだか時のおじいさんに似てるね」

生「わっはっは、あそこまで頑固者じゃないわ」

アクヴォ「えっ、知ってるのー?」

生「ああ、古い付き合いじゃかひのう」

ヴィーノ「(アクヴォに向かって)それより、探し物は見つかったの?」

アクヴォ「…うん…見つかったけど…」

アクヴォ、空っぽの瓶を見つめる。

アクヴォ「…もったいいものだと思ってた…」

ヴィーノ「…そう…」

シプチャル「(ヴィーノを指して)でも、その子が持っている不幸よりはマシでしょ?」

ヴィーノ(シプチャルを睨む)

レーヴォ「も、みんな仲良〜!」

リバー「しかし…どうしたものか」

レーヴォ「なにが?」

リバー「船が壊れた以上、どうやって未来の王国に帰る?」

子供たち「…あぁーっ!」

シプチャル「(リバーに)あなたが無茶なことするからあ〜っ!」

アクヴォ「ああ、どうしよう…!おじいさん、何とかならないかなあ?」

生「大丈夫じゃよ。のんびりしておれば、そのうち時が解決する」

アクヴォ「…ほんと?」じゃあ、みんなでのんびりしてよう」

子供たち「うん…」

各々自由にぐっすり子供たち。シプチャルはまだリバーに文句を言っている。

ヴィーノ「(生に向かって)…ねえ!」

生「なんじゃ?」

ヴィーノ「あたし、一緒に生まれてい人がいたの。そうしたら時のおじいさんは、

『そんなことは生に頼め』と言っていたわ。あなたが、あたしたちの生まれる

時がいつなのか決めたの?」

生「そうじゃよ。もう随分と昔に、わしと時とで決めたんじゃ」

ヴィーノ「なら…!お願い、今すぐあたしを地球に行かせて!会えなかったとしても

せめて、あの人の生きた証が地球に残っているうちに、どうしても生まれてい

の…」

生、ゆっく〜と首を横に振る。

ヴィーノ「じいじい…」

生「すまんのう、一度定めたものを覆すことはできません」

ヴィーノ「…そんな…」

ヴィーノ、その場に膝をついて泣き伏せる。

ヴィーノ「…それなら…なんのために地球に行かなきゃならないの…？ あの人がいない人生なんて、生まれたって仕方ない！」

シプチャル「そんなこと言ったって…。僕たちは生まれるためにここにいるんだよ？」

レーヴォ「…なんで…生まれなきゃいけないんだよ？」

シプチャル「え？」

レーヴォ「僕、ずっと地球に行きたかった。何もかもが綺麗で、みんな優しく、良いことしかない星だと思ってたから！…でも…そうじゃないのかもしれない…。だったら僕、生まれるの、怖い…！」

子供たち4人、それぞれ考えこむ様子。

アクヴォ「そつだ…悲しみさんが言ってた。生のおじいさんなら、答えを持ってるかもしれないって」

子供たちが一斉に生を見る。

アクヴォ「ねえ、おじいさん！どうしてお母さんは泣いてたのかな？僕は生まれなくてよかったのかな？この先も生まれたい方がいいのかな？生まれるって、いたいどういふことなのかな？僕、なんにもわからない…でも知りたいんだ！」

生「それはな…誰にもわからない。生まれる時も、死ぬ時も、自分では何一つ決められない。全ては自然の摂理であり、宇宙の神秘。とれだけ必死に理由を追い求めたところで、納得することなど到底できな」

ヴィーノ「そんなのってないわ。ちゃんと答えてよー」

生「誰にもわからないだけで、お前さんたちの疑問の理由（わけ）は確かに存在する。皆がそれに納得することなど、到底できぬがな。それがわしの答えじゃ」

寂然としない様子の子供たち。するとそこへ突然…

時(OFF)「おー…生はいるかー」

子供たち「………」

レーヴォ「じ、じの事はわか…！」

舞台袖から時のおじいさんが登場。

時「いたら返事へへ…（子供たちを見つけてビックリ）」

子供たち「あああ〜〜っ…！」

子供たち、全員がリバーシの後ろに隠れようとする。

時「お前たち、どっしてここに…？」（リバーシを指して）「貴様はなんだ…？」

リバーシ「私は自由に生きを喜び…この子たちの付添だー」

レーヴォ「（生に向かっ）時のおじいさんが来るって知ってたの…？」

生「だから『時が解決する』と言ったろうっ？」

アクヴォ「あれ、時のおじいさんのことだったの…？」

【青い鳥】の未来の国のお話

時 「未来の王国の掟を破りおって……！どうなるかわかってるんだろっ！」

時、子供たちを捕まえようとしますが、リバーシに阻まれる。

リバーシ「乱暴はよさないか！」

時 「たかが喜び風情が口を出すな！（子供たちに向かって）おいお前たち、今すぐ前に出ないと妹の永遠のところへ連れて行って、未来永劫閉じ込めてやるぞー！」

リバーシ「やだ……！」

リバーシ「なんて酷いことを！自由への冒涇だ！」

泣き出すリバーシに、怯える他の子供たち。
見かねた生が仲裁に入る。

生 「まあまあ、そう怒らなくても。ちょっとぐらい大目に見てやればいいじゃないか」

時 「管轄外のことには口を出すな！」

生 「…実は永遠からわしに相談があつてな」

時 「なに？」

生 「お前が事あるごとに子供をポンポン連れてくるから、泣き声で頭が変になりそうだとおつた。わしからやめるよう言ってくれと頼まれての」

時 「…あいつめ、直接言えはいいものを！」

生 「第一、掟だなんだと縛り付けなくても、子供たちだけで外に出るのは危ないと素直に言えはいいだろう。まあ心配なのはわかるがな」

アクヴォ「心配？時のおじいさんが？」

生 「ああ見えてなかなか愛情深い奴での」

時 「（生に向かって）余計なことを言つな！」

アクヴォ、恐る恐る時の前へ出る。他の子供たちはアクヴォを心配して止めようとしますが、構わず時のもとまで行くアクヴォ。

アクヴォ「あの…僕、心配かけたかったわけじゃないんだ。勝手に未来の王国の外に出て……ごめんさい！」

子供たち、謝るアクヴォを見て迷った末に、一緒に時の前へ。

子供たち「ごめんさい！」

時、怒りの顔のままたっぴり考え込んで、

時 「…全員、未来の王国に戻ったら、たっぴりお説教だぞー！」

リバーシ「ええ……！」

シプチャル「船は壊れるし、おじいさんには怒られるし、散々んだけど……」「ヴィーノ」……でもあたし、この旅「びびってよかった」

【青い鳥】の未来の国のお話

子供たち、お互いの顔を見合っ。

ヴィーノ「もうあの人に逢えないって思うと、涙が溢れて仕方ないけど…。あのまま未来の王国で泣き続けていても、きっと何も変わらなかった。この悲しみを持って、あたし…地球に行くわ。…みんな、ありがとうー」

レーヴォ「…僕も！怖かったけど、みんなと一緒にいられて、すごく楽しかったー」

シプチャル「地球に行くのが怖くなったって言ってなかつたっけ」

レーヴォ「怖いけど…旅に出なきゃそれも知らないままだったもん。…じいじのを、セーチョーっていうんだよね？」

シプチャル「成長ね…。確かに僕の船も…それから僕も。この度を通じて、成長できた気がする。(アクヴォに)…君のおかげなのかもね」

子供たち、いっせいに時の方を見る。

時 「話は未来の王国でもできるだろう。さっさと帰るぞ」

シプチャル「でも、どうもっけ」

時 「すくそくに、あけぼのを付けてある。本来地球に生まれる子供だけが乗れるものだが…特別に乗せてやる」

レーヴォ「ほんとー？船の先っぽのところ、立ってもいいー」

時 「勝手にしろ」

レーヴォ「やったー！僕、あそこに立つの憧れだったんだー」

アクヴォ「喜びさんも一緒に乗っていいの？」

子供たち「…ええっ！」

子供たち「…ええっ！」

アクヴォ「でも、喜びさんはじいじやって帰るの？」

時 「(生に向かつて)お前が幸福の花園まで送り届ける」

生 「ついでに乗せて行ってやればいいじゃ」

時 「お前と違ってこっちは忙しいんだ！寄り道する暇などあるかー」

リバーシ、不本意そうな表情で子供たちのもとへ歩み寄る。

アクヴォ「本当にこっでお別れ…」

リバーシ「なあに、心配しなくても、いずれまた会える」

(トリバーシ)

お前たちが地球に生まれたなら
いつか私を思い出してくれ

目覚ましをかけずに眠りにつく時
私もグースカ眠ってる

【青い鳥】の未来の国のお話

好きなおやつをたらふく食べる時
私の腹も満たされている

仕事をサボって遠くへ行く時
私がつっと傍にいる

お前の心が自由を感じたなら
いつだって私に会えるのよ

リベール「だから、さよならのキスは必要ないぞ」
アクヴォ「じゃあ、こういう時どうすればいいの？」

リベール、子供たちに向かって指を差しながらウインクして、

リベール「『またね』。いつだ！」

子供たち、リベールの動きを真似する。

子供たち「またね！」

ここから歌のクライマックス。6. 最果てへの航海（船の中）での歌のピアノ
イズ。

(♪) アクヴォー行&リベール
ああこの旅は終わってしまっけど
まだまだどこまでも行ってみたい
行けるところまで行こう仲間と共に…

歌の終わりとともに、照明が溶暗し舞台転換。生の淵源↓未来の王国へ。

8. 未来の王国

舞台転換完了したら溶明。舞台上にはけんけんで一人遊びをしているモルト。
そこへ舞台袖からアクヴォ登場。

モルト「あっ！」
アクヴォ「久しぶりー！」

アクヴォに気付いたモルト、笑顔でアクヴォのもとへ駆けよる。

モルト「戻ってきたんだね！おじいさんにバレなかった？」
アクヴォ「…バレた」

モルト「…あちゃー。怒られたっ」

【青い鳥】の未来の国のお話

アクヴォ「すつつつくく…」

モルト「あはは…大変だったね。それで、探し物は見つかったの？」

アクヴォ「あー…うん…」

モルト「どれどれ？見せてー！」

アクヴォ、気まずそうにポケットの中から生の淵源で手に入れた空き瓶を取り出す。

すると、いつの間にか空き瓶の中に、キラキラ光る宝石（ムーンストーン）が入ってる。

アクヴォ「あれ？」

モルト「わあ、綺麗だねー！」

アクヴォ「こんなの入ってなかった…」

モルト「えっ！」

アクヴォ「病気をいっぱい詰めてただけで、全部捨てちゃって。見つけた時には、

モルト「じゃあ、これ何なんだろ？」

2人で空き瓶の中をじーっと見つめる。

すると舞台袖からしれっとリバーレが現れ、2人の背後について瓶の中を覗き込む。

リバーレ「これはムーンストーンだなー！」

アクヴォ・モルト「うわあー？」

驚いて振り返るアクヴォとモルト。リバーレは悪戯っぽい笑顔を浮かべている。

アクヴォ「喜びさんー？…なんているのー？」

リバーレ「私があれしきのごとで諦めると思ったか？ 隙をついて、こっそりあげばの

に乗り込んでいたのさー！」

アクヴォ「…あんなに感動的なお別れしたの…」

モルト「誰…？」

リバーレ「私は自由を愛する喜び。この子の旅の仲間だ！（アクヴォに）しかしお前、

よっぽど旅が気に入ったんだな」

アクヴォ「どうしようもない」

リバーレ「宝石の中をよく見てみる。何が見える？」

アクヴォ、瓶の中の宝石をじっと見つめる。

アクヴォ「…すごく長い道みたいに見える」

リバーレ「お前が地球で歩むことになる旅路だ」

モルト「旅路？」

リバーレ「地球ではこの宝石を『旅人の石』とも呼ぶらしい」

モルト「じゃあ君は、生まれたら旅人になるんだねー！」

【青い鳥】の未来の国のお話

リバーレ「高名な冒険家かもしれんぞー」

アクヴォ「旅って、なんのために?どこへ行くの?」

リバーレ「さあな。それは地球に生まれたお前の自由だ!」

アクヴォ「僕の…自由…」

そこへ鐘の音がいつなる。

モルト「鐘が鳴った!また誰か生まれに行くんだ!」

リバーレ「あのじいさんに見つかったら面倒だ。私は身を隠すつもりー」

アクヴォ「喜びさんはずっと未来の王国にいるの?」

リバーレ「どうだかな。ずっといたいと思えばいるし、別の国へ行きたいと思ったら出て行く。全ては私の自由だ!」

リバーレ、舞台端に駆けて行って、

リバーレ「それでは子供たち!またな!」

アクヴォ「またね!」

リバーレ、アクヴォらに向けてウィンクしたあと、客席に向かってウィンクしてから、舞台袖へハケていく。

モルト「僕、喜びに会うの初めて!あんな感じなんだね!」

アクヴォ「他の喜びはもっと大人しかったよ」

2つめの鐘の音。

モルト「それ、今度は失くさないようにね!」

アクヴォ「うん!君もいつか、地球に持っていくものが見つかるといいね」

モルト、ちょっと気まずそうな表情を浮かべ、少しの間があってから、

モルト「…ねえ、内緒にしてくわね?」

アクヴォ「なに?」

モルト「誰にも言うなって言われたんだけど…君は友達だから、特別」

モルト、ポケットの中からボタンの付いたスイッチを取り出して、アクヴォに見せる。

アクヴォ「何じゃ?」

モルト「僕、ほんとに手ぶらじゃないんだ。うんと昔から、地球に持って行くものを

じいさんの隠しツメの」

アクヴォ「そっだったの?」

モルト「うん。黙っててくれね」

アクヴォ「謝らなくてもいいよ!…ね、見てもらって!」

【青い鳥】の未来の国のお話

モルト「いいよー」

アクヴォ、モルトからスイッチを受け取り、じろじろと眺める。

アクヴォ「これはなんの発明？」

モルト「死だよ」

アクヴォ「死？」

モルト「僕はね、地球上のほとんどの生き物に等しく訪れる死を持っていくんだ」

アクヴォ「それって…悪いものなの？」

モルト「わかんない。…僕が生まれるのは、うんと未来の話なんだって。だからずー

っと順番待ちなんだ」

アクヴォ「やっぱ早く生まれたい？」

モルト「そりゃね。地球にいったらやってみたいこと、たくさんある」

アクヴォ「僕も！やりたいことだらけー」

3つめの鐘の音が鳴ると同時に、音楽スタート。

モルト「いけない！早く行かないと、まだおじいさんと叱られる」

アクヴォ「行くっー」

モルト「うんー」

アクヴォとモルトが舞台中央に走って移動してから、客席の方を回いて、歌い出す。

(♪アクヴォ)

いつか地球に生まれたら

朝の陽ざしを浴びながら

きれいな空気を胸いっぱい

吸い込んでみたいな

(♪モルト)

いつか地球に生まれたら

お母さんと一緒に寝てみたい

ふかふかのベッドに寝転んで

子守唄を聞くんだ

(♪2人)

いつか地球に行けたなら

きっと夢が叶うはず

お父さんとお母さんに愛されて

たくさん友達と遊べるんだ

歌の最中、舞台袖から次々と子供1〜9とヴィーノ、レーヴォ、シプチャルが現れて、歌に加わる。

【青い鳥】の未来の国のお話

(♪アクヴオ)
いつか地球に生まれたら
涙を流してみたいんだ
悲しいことは嫌だけど
少しだけなら耐えられる

(♪モルト)
いつか地球に生まれたら
恋って何かわかるかな？
実は恋人同士のあの子たち
ちよっぴり憧れてたんだ

(♪子供たち全員)
いつか地球に行けたなら
きっと夢が叶うはず
楽しくて嬉しくて素敵な人生が
きっと僕たちを待ってる

(♪アクヴオ)
遠く遠く 青い惑星(ほし)
あれは地球 僕らの星
いつの日か あげぼのと共に
あの星に行くのね

(♪子供たち全員)
いつの日か あげぼのと共に
あの星へ行くじう

閉幕(幕が締めまりきる前に、リベールがしねっと子供たちに混じって客席に手を振る)。